

心理的競技能力, 集団凝集性, 集団効力感および
 スポーツ集団のチームイメージ評価の関連性
 —大学サッカー部を対象にして—

山家 龍汰 (競技スポーツ学科 スポーツビジネスコース)
 指導教員 山本 達三

キーワード: チームパフォーマンス, チーム調和

1. 緒言

スポーツ組織が組織目標を達成するためには, 選手のモチベーションマネジメントや組織成員全体の心理的状态をコントロールすることが重要である.

徳永ら (2000) は, 心理的競技能力について競技レベルの高い選手ほど心理的競技能力が高く, 競技レベルの低い選手は心理的競技能力が低いということを報告している. また, 阿江 (1985) は, 集団の心理的側面である集団凝集性について「競技レベルが高くなるにつれ, 競技志向が大きくなり, 競技レベルの低下とともに, レクリエーション志向が大きくなる」ことを報告している. さらに, 集団効力感について, 河津ら (2012) は, チームパフォーマンスと正の関連性を有していることを報告している.

竹村ら (2013) は, 上記の個別に行われてきたスポーツ集団の心理状態の測定尺度を利用して, スポーツチームのイメージ評価と集団凝集性, 集団効力感との関連性を検討している. 本研究では, 竹村の研究 (2013) に, 徳永の心理的競技能力を加え, 集団凝集性, 集団効力感, スポーツ集団のチームイメージ評価の4要因の関連性を明らかにすることを目的とする.

2. 研究方法

滋賀県スポーツ単科大学に所属する学生のサッカー部チーム T・チーム I を対象とし, アンケート調査を行った. 質問内容は, 心理状態診断検査 (DIPS-B. 1), 集団凝集性項目テスト, 集団効力感尺度, スポーツチームイメージ評価尺度とし, 2 週毎の 5 回のパネル調査を実施した.

3. 結果

表は全サンプルで重回帰分析を行った結果である. 集団凝集性や集団効力感に対して, チームイメージ評価の因子で多く有意な関連がみとめられ, 心理的競技能力では競技意欲が各因子

に対して多く有意な関連がみとめられた. 競技レベルではチーム T が上位, チーム I は下位チームとなる. チーム別に分けた結果, 上位チームは下位チームよりも心理的競技能力と集団凝集性, 集団効力感の関連がみとめられなかった.

表 全サンプルでの重回帰分析 (ステップワイズ法)

	R ²	集団凝集性			集団効力感		チームイメージ評価	
		メンバーの親密さ	目標への準備	集団結束効力感	集団相互支援効力感	チーム調和	チームパフォーマンス	
心理的競技能力		.430**	.336**	.643**	.680**	.578**	.560**	
競技意欲	.162*	-	.140*	.168*	-	.136*	-	
精神の安定・集中	-	-	-	-	-	-	-	
作戦能力	-	.111*	-	-	-	.097*	-	
自信	-	-	-	-	-	-	-	
メンバーの親密さ			.196**	.183*	.136*	-	-	
目標への準備				.185*	-	-	-	
集団結束効力感					.481**	.665**	-	
集団相互支援効力感							.426**	
チーム調和								.204*
チームパフォーマンス								
					.367**	.166*		

*p<.05, **p<.01

4. 考察

檜塚ら (2008) の先行研究によれば, 集団凝集性は心理的競技能力の「自信」と「作戦能力」が関連していることで高まり, 試合成績や競技パフォーマンスに影響すると指摘されているが, 本研究の分析では, 集団凝集性の「目標への準備」に対して「作戦能力」のみ弱い関連性が認められた. 但し, 「集団相互支援効力感」, 「チーム調和」では, 一定の関連性がみとめられ, 高い値を示した.

集団効力感では, 竹村ら (2013) の指摘通り, チームイメージが高く備わっているとき, 集団のまとまりやチームが結束することへの意識が高くなるという結果となった. 今後の課題として, 大学内での比較だけでなく, 他大学を加え, 集団のまとまりと, 選手個々の個人要因との関係を検証することにより, それぞれの特性を把握でき, チームマネジメント向上に貢献できると考える.

[参考文献]

竹村りょうこ, 島本好平, 加藤貴昭, 佐々木三男. (2013) 優れたスポーツ集団のチームイメージを評価する尺度開発研究. スポーツ産業学研究, Vol. 23: 33-43.